

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 12 年 12 月 ～生産は下げ止まりへ

経済調査部門 経済調査室長 斎藤 太郎

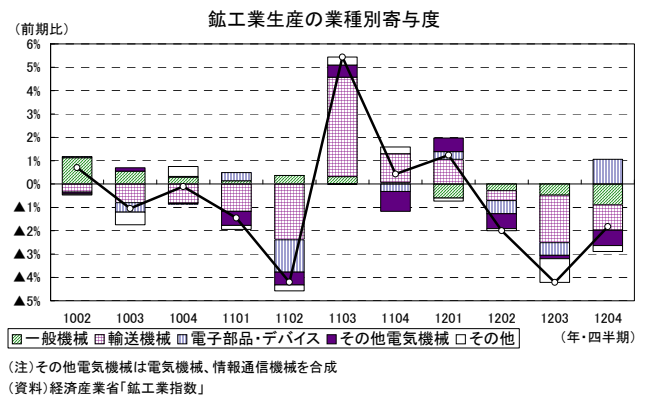
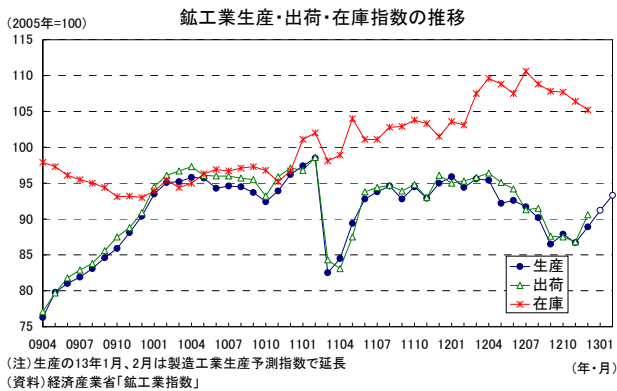
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 10-12 月期は 3 四半期連続の減産も、生産は下げ止まり

経済産業省が 1 月 31 日に公表した鉱工業指数によると、12 年 12 月の鉱工業生産指数は前月比 2.5%と 2 ヶ月ぶりの上昇となったが、先月時点の予測指数の伸び（前月比 6.7%）、事前の市場予想（QUICK 集計：前月比 4.0%、当社予想も同 4.0%）は大きく下回った。出荷指数は前月比 4.4%と 4 ヶ月ぶりの上昇、在庫指数は前月比▲1.1%と 5 ヶ月連続の低下となった。

12 月の生産を業種別に見ると、国内販売の持ち直しを背景に輸送機械が前月比 6.9%の高い伸びとなったほか、輸出の低迷を主因として落ち込みが続いていた一般機械（前月比 8.7%）、鉄鋼（同 2.2%）も上昇に転じた。

速報段階で公表される 16 業種中、12 業種が前月比で上昇、4 業種が低下した。



12 年 10-12 月期の生産は前期比▲1.9%と 3 四半期連続で低下したが、7-9 月期の同▲4.2%からは低下幅が縮小した。業種別には、情報通信機械が前期比▲23.4%と急速に落ち込み、輸送機械も同▲6.4%と 3 四半期連続の低下となったが、スマートフォン向けの需要拡大を背景に電子部品・デバイスが前期比 12.0%の高い伸びとなり、生産の下支え役となった。

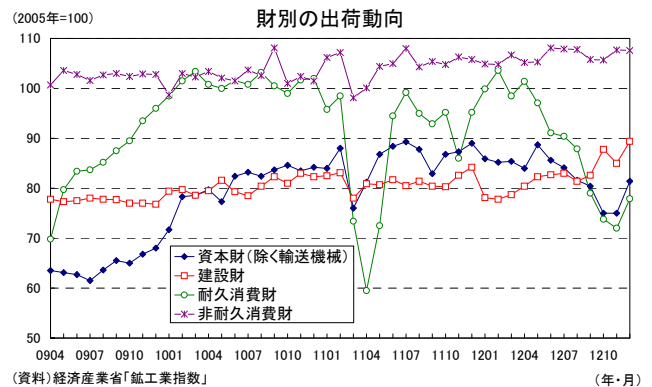
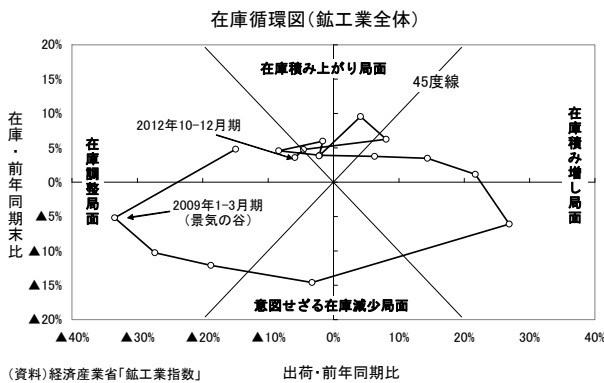
2. 在庫調整が進展

10-12 月期の在庫循環図を確認すると、7-9 月期の「在庫積みあがり局面」から「在庫調整局面」へと移行した。出荷は前年比▲5.9%と 7-9 月期の同▲4.5%からマイナス幅が拡大したが、在庫の伸びが 7-9 月期の前年比 4.8%から同 3.6%へと鈍化した。7-9 月期の在庫指数は前年比では増加し

ているが、前期比では▲2.4%の低下となっており、在庫調整が比較的順調に進捗していることを示している。

財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は12年7-9月期の前期比▲4.8%の後、10-12月期は同▲6.0%となった。一方、建設投資の一致指標である建設財出荷は12年7-9月期の前期比0.6%の後、10-12月期は同6.2%となった。GDP統計の設備投資は12年7-9月期に前期比▲3.0%と大きく落ち込んだ。建設投資は底堅さを維持しているものの、機械投資の落ち込みが続いているため、GDP統計の設備投資は7-9月期の前期比▲3.0%に続き10-12月期も減少する可能性が高い。

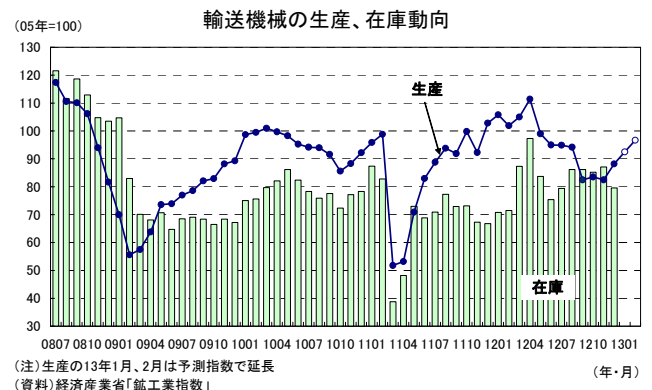
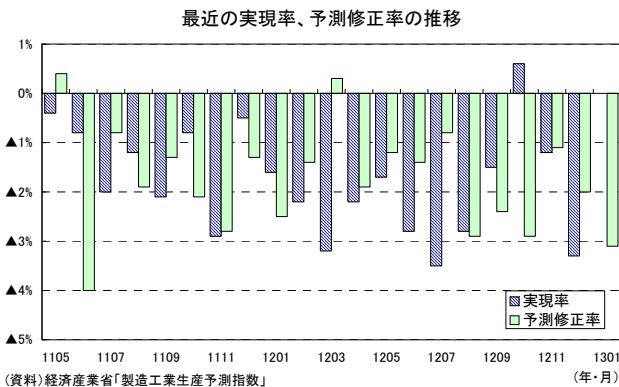
消費財出荷指数は12年7-9月期の前期比▲6.1%の後、10-12月期は同▲6.7%となった。自動車などの耐久消費財が7-9月期の前期比▲11.1%に続き、同▲13.1%と大きく落ち込んだことが響いた。非耐久消費財は前期比▲0.2%（7-9月期：同0.9%）とほぼ横ばいとなった。



3. 1-3月期は4四半期ぶりの増産へ

製造工業生産予測指数は、13年1月が前月比2.6%、2月が同2.3%、生産計画の修正状況を示す実現率（12月）、予測修正率（1月）はそれぞれ▲3.3%、▲3.1%と比較的大きなマイナスとなった。

予測指数を業種別に見ると、1月、2月ともに増産の主役は輸送機械で、1月が前月比4.9%、2月が同4.5%と比較的高い伸びとなっている。輸送機械は12年春以降の生産減少の主因となっていたが、再び生産の牽引役となる可能性が高い。



景気後退の主因となった輸出は低迷が続いているが、中国をはじめとしたアジア経済に回復の動きが見られること、最近の円安が追い風となることから、年明け以降持ち直しに向かうことが予想される。

12年12月の生産指数を13年1月、2月の予測指数で先延ばし（3月は横ばいと仮定）すると、13年1-3月期は前期比5.5%の上昇となる。生産計画が大幅に下方修正される傾向が続いているため、この数字はかなり割り引いてみる必要があるが、13年1-3月期は4四半期ぶりの増産となることが見込まれる。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。